祭礼の傘鉾・風流傘２
―九州各地の都市祭礼と傘鉾―

段　上　達　雄

【要　　旨】
九州における大規模都市祭礼に登場する傘鉾について、その祭礼の概要と共に傘鉾の形態と歴史を明らかにしてゆく。

【キーワード】
傘鉾・八代妙見祭・小倉祇園太鼓・鹿児島おぎおんさぁ

⑴ 八代妙見祭の笠鉾

① 八代妙見祭

八代妙見祭は、八代市妙見松に鎮座する八代神社（妙見宮）の秋季例大祭で、毎年11月22日と23日に催される。11月22日午後２時から４時に八代神社から塩屋八幡宮までお下りの神幸行列が行われる。午後５時30分から８時30分まで、御夜（前夜祭）が本町アーケード街一帯で実施される。11月23日午前７時30分から午後５時にかけてお上りの神幸行列が行われる。７時30分に塩屋八幡宮を出立、、９時頃にＪＲ八代駅前で次々に演舞が行われ、11時頃に八代神社に到着。宮地小学校の校庭に笠鉾と亀蛇などを並べる。12時30分から砥崎河原で獅子舞の演舞があり、午後１時30分に神幸行列が八代神社を出立して砥崎河原に向かう。１時10分から花奴・亀蛇の演舞があり、飾り馬が疾走する。２時30分に獅子と神馬、神輿は中宮に向かって出立。中宮で獅子舞の演舞が行われ、３時30分に八代神社に向かって出立。３時には笠鉾や亀蛇は市内に向けて出発し、４時30頃に自然解散となる。

整列した八代妙見祭の傘鉾

② 八代妙見祭の笠鉾

八代妙見祭の笠鉾は９基あり、木質構造の二層の笠部（傘部、屋根）を持ち、頂きに人形や造り物などを載せた、他に類例のない形式を有している。一見すると傘鉾とは思えない形態ではあるが、架台には一本の柱が立ち、それに上部の笠部（上屋根）が装着される。近世の「妙見宮祭礼絵巻」に見られるように、

架台に担ぎ棒二本を挿した舁山であるが、現在はタイヤ等をつけた車台に載せて曳いている。

八代妙見祭の傘鉾は、風流としての趣向の要素だけが目につくが、「本蝶蕪」のような町名を表現したものもあり、町印としての要素も見逃せない。また、巡行の時、横断歩道橋の下を通過する場合、橋上に人が通らないように注意するし、九州新幹線の高架下を通る場合にも、列車が通過する時間を避けるように配慮している。これは笠鉾に神霊の依代として機能を認めているからである。

１）笠鉾「菊慈童」（宮之町）

笠鉾「菊慈童」の平面形は八角形で、他の傘鉾には見られない特徴である。笠（屋根）は２層になっている。全高は約4.7ｍ。部材総数255点。

笠鉾の部材を納める収納箱に元文三年（1738）の墨書があり、現存する八代の笠鉾の中では最も古い記年銘である。

笠鉾の最上部に「菊慈童」の人形を載せ、その背後に菊を立てる。「菊慈童」は観世流の謡曲の演目で、他流派は「枕慈童」という。そのあらすじは次のようなものである。

傘鉾「菊慈童」の組立て

周の穆王に仕えていた慈童は、皇帝の枕を跨ぐ過ちを犯したため、死刑は免れたものの、酈縣山に流刑になってしまった。穆王は慈童を憐れみ、密かに法華経の二句の偈を書いた枕を託し、毎朝、偈を唱えて礼拝するように教え諭した。慈童が忘れないように菊の葉に偈を写すと、菊の葉の露は霊薬となり、それ飲んだ童は仙人となって八百余年も不老長寿を保った。魏の文帝の臣下が勅命によって酈縣山の麓に湧出る薬水を尋ねて行くと、菊の花の咲き乱れた山中の庵で菊慈童に出会う。菊水をすすめて、慈童は山路の仙家に入る。

上屋根の下には八代城主松井家のお抱え絵師甲斐良郷が描いた金襖８面がはめられ、下屋根下の伊達板には菊水の彫刻が施されている。また、水引幕は黒ビロード地で、菊花流水文を金糸で刺繍する。その他に「黒繻子地菊流水模様繍水引幕」「白緋綾化繊二段水引幕」と共に弘化三年（1846）銘のある古い幕もある。

八代妙見祭の神幸行列では、他の８基の笠鉾は神輿の後ろに付き従って巡行するが、唯一、笠鉾「菊慈童」だけは神輿よりも前を進む決まりとなっている。ただし、祭礼日がどのような悪天候でも神輿に随伴しなければならない。このように笠鉾「菊慈童」は八代妙見祭では特別な笠鉾と位置づけられてきた。

２）笠鉾「本蝶蕪」（本町一丁目・二丁目）

笠鉾「本蝶蕪」は六角二層で、上屋根の棟先に蕨手が突き出している。全高は約4.6ｍ。部材総数196点。下屋根の押え板に「寛」と「弐」の墨書が認められ、寛延二年（1749）、あるいは寛政二年（1790）に本体部分が制作されたのではないかと推測されている。

笠鉾の上部に大きく葉を伸ばした白い大蕪を載せ、その上に揚羽蝶、またその上に「本」の金文字を立てる。蕪は商売繁盛を意味する株と同音である。江戸時代、株は商売上の特権を意味し、そのような特権を持つ集団のことを株仲間と呼んだ。揚羽蝶の蝶は銭を意味する鳥目に通じ、

揚げという語句から、商売繁盛という意味になる。近世、本町は八代城下で最も栄えた商業地帯で、蕪も揚羽蝶も商人にとって縁起の良いものであった。

上屋根の下の梅の間伊達板は金箔地に梅の枝の造り物を飾り、下屋根の下に「青貝伊達板」を下げる。青貝細工とは螺鈿のことで、特に薄い貝片を用いる場合を意味することもある。黒漆地に真珠光沢面を表にした貝片を伏せたもので、桜、牡丹、菊、梅、椿、楓の季節の草木６種を題材にしており、収納箱に文化七年（1801）の墨書がある。水引幕は「灘渡りの蝶」を題材とした「白地海原群飛蝶模様綴水引幕」で、昭和11年（1936）に制作されたものである。平成元年（1989）にふるさと創生基金で水引幕を新調した時、黒ビロード地に金糸刺繍で再現した。また、「緋羅紗地水引幕」「濃紺麻地丸に二引九曜紋模様染水引幕」もある。

３）笠鉾「蘇鉄」（二之町）

笠鉾「蘇鉄」は六角二層で、下屋根の６面はいずれも唐破風になっており、棟飾りの端には白兎の彫刻が取り付けられている。全高は約4.5ｍ。部材総数190点。上段の欄間彫刻の裏面に寛政五年（1793）の墨書がある。

笠鉾の最上部に植木鉢に植栽した「蘇鉄」を載せる。蘇鉄の葉だけは本物で、寺院や学校に植栽された蘇鉄の葉を毎年剪定し、それを蘇鉄の幹に挿し込むのだという。蘇鉄は弱った時に、根元に鉄釘を打ち込むと元気になるということから名付けられたという。そのため、不老不死とか起死回生を表し、優れた人材が現れて家門を繁栄させると言われ、縁起の良い植物として知られている。

上段と下段の欄間（伊達板）は胡粉地の上に岩絵具で彩色されており、上欄間の画題は「天女」「鶴」「菊」「蓮を持つ天女」「桐」「鶴」で、下欄間は「麒麟と雲」「中亀小亀と波」「鳥と鳥の尾」「龍」「大亀と立浪」「鳳凰と鳥の尾」である。現在の水引幕は黒ビロード地に不老長寿の象徴である蓑亀を金糸で刺繍している。他に「黒紋繻子地巌に波瑞亀模様繍水引幕」「緋羅紗地水引幕」がある

４）笠鉾「西王母」（通町）

笠鉾「西王母」は六角二層で、最上部には西王母の人形と桃の木の造り物を載せる。上屋根は唐破風を平にしたように波打ち、棟先には金色の桃に繧繝模様の雲をモチーフにした華やかな飾りを付ける。なお、桃は西王母の不老不死の薬である。全高は約4.25ｍ。部材総数232点。下屋根隅木雨覆の部材に「延」「享」「元」「年」「甲」「子」」の墨書が廻り番付に記され、延享元年（1744）の制作だと考えられている。

西王母は中国古代に成立した仙女のことで、崑崙山に住み，不老不死の薬（蟠桃等）をもつ神仙といわれ，仙女の世界の女主的な存在として民間で信仰されてきた。

上層の欄間は「牡丹の間」と呼ばれ、牡丹の花と唐獅子の彩色彫刻を飾り、下段の伊達板には「鯉の間」といって、登竜門における鯉の滝登りの彩色彫刻を施している。幕は鯉の模様を刺繍した「浅葱地切嵌め波に鯉模様繍水引」があるが、傷みが激しく、古い「黒羅紗地金糸九曜紋水引幕」を参考に黒繻子地に九曜紋を駒縫い刺繍した水引を復元制作して使用している。

５）笠鉾「猩々」（紺屋町）

笠鉾「猩々」は六角二層で、最上部に猩々の人形を載せる。酒甕の縁に左肘を乗せて頬杖をつき、右手で大きな朱盃を差し出す。上屋根の軒先は丸く曲線を描く蕨手（ゼンマイ）をつける。また、下屋根の軒飾り上には、小さな猩々の人形をそれぞれ載せる。全高は約3.9ｍ。部材総数271点。上屋根軒先を支える腕木に安永五年（1776）の墨書がある。

「猩々」は謡曲の演目である。昔、揚子江の傍らに住んでいた親孝行者の高風は、市場で酒を

売れば多くの富を得るという夢を見て、市場で酒を売り始める。酒売りは順調で毎日酒を買いに来る客の中に、いくら飲んでも酒に酔う様子がない者がいた。不思議に思った高風が名を尋ねると、自分は猩々という者だと答えて立ち去った。そこで高風は月夜の晩に川辺で酒を用意して猩々を待つと、水中の波間より猩々が現れ、共に酒を酌み交わす。猩々は舞い踊り、高風の徳を褒めて尽きる事のない酒壷を与えて去って行く。縁起の良い五番目物の能である。

上層の欄間の青貝鳥居形は微塵青貝を用いたものだが、損傷が激しいため、復元新調している。奥の襖は金箔地に飛翔する鶴の群を描き、鳥居形の周囲に朱塗りの勾欄を巡らす。下欄間は金箔地に「浪に亀」「浪に飛龍」「牡丹に麝香」「雪兎（？）」「葡萄に栗鼠」「紅葉に鹿」の彫刻を飾る。上幕として「白塩瀬地巌波に千鳥模様繍水引幕」「緋羅紗地八仙慶寿模様繍水引幕」「黒地酒瓶杯杓模様繍水引幕（旧幕）」があり、下幕には「黒繻子地錨九曜丸に二引散し模様繍水引幕」「緋羅紗地水引幕（旧幕）」がある。

６）笠鉾「蜜柑」（中島町）

笠鉾「蜜柑」は六角二層で、最上部に植木鉢に植栽した蜜柑の木を載せる。いずれも造り物で、木彫りの幹に蜜柑と葉をつけている。笠鉾の全高は約4.5ｍ。部材総数213点。上屋根の蛇腹部材裏面に宝暦三年(1753)の墨書がある。

近世、八代の蜜柑は宮中や将軍家に献上されたという。記紀によれば、垂仁天皇が田道間守を常世に遣わして、不老不死の力を持つ「ときじくのかぐのこのみ（非時香木実＝橘＝蜜柑）」を求めさせたが、田道間守が持ち帰った時には天皇は既に崩御されていたという。このように蜜柑は不老長寿の力があると考えられており、たわわに稔った蜜柑の木は子孫繁栄を意味する縁起の良い果樹であった。

下屋根の隅木６カ所に猿の彫刻を載せ、上層の高欄付きの縁に黒ぶちの白い犬の彫刻３頭を飾る。上層の伊達板は縁の外に高欄を巡らせて、手前に瓦灯、奥に簾を掛け、金箔雲形襖をはめる奥行きのある構成になっている。幕は「五色七宝繋結網水引幕」と「緋羅紗水引幕」とがある。

７）笠鉾「恵比須」（徳渕・渕原町）

笠鉾「恵比須」は六角二層で、最上部に釣竿を掲げ持ち、鯛の背に乗った恵比須神を載せる。鯛の下には波形の造り物がある。笠鉾の全高は約4.5ｍ。部材総数145点。鯛と波形に明和七年（1764）の墨書がある。

徳渕は古くからの港で、大漁を祝う恵比須神を題材としている、明和元年に「桐に鳳凰」から「恵比須」に替わったことが「八代紀行」に記されているという。

下屋根の隅木６カ所に白木の唐獅子の彫刻を載せ、屋根の谷部に葡萄と栗鼠の彫刻を配す。上層の伊達板は朱塗りの高欄を巡らせ、六角火灯窓越しに金色円筒を見せるようになっている。幕は「黒天鵞絨地岩に獅子牡丹模様繍水引」と「緋羅紗地水引幕」とがある。

８）笠鉾「松」（平河原町）

笠鉾「松」は六角二層で、最上部に植木鉢に植栽した松の木の造り物を載せる。笠鉾の全高は約4.3ｍ。部材総数162点。上屋根欄間六歌仙絵に文化二年（1805）の墨書がある。

この笠鉾は謡曲の「高砂」を題材にしている。松の木は常緑の針葉樹で、永遠の生命を象徴し、影向の松のように、神の依り代でもある霊木である。

「翁」「媼」各１体、「浪に鶴」「浪に巌と親子亀」各２体の計６体を下層屋根の妻飾りに載せる。上層の伊達板は朱塗りの高欄を巡らせ、簾を通して六歌仙の絵を見せるようになっている。下層

の伊達板はケヤキ製で、梅や竹、菊や蘭などの彫刻を施す。幕は「黒天鵞絨地向い双龍模様繍水引幕」と「緋羅紗地水引幕」がある。

９）笠鉾「迦陵頻伽」（塩屋町）

笠鉾「迦陵頻伽」は八角三層で、最上部に雲形の造り物上に飛翔する迦陵頻伽の人形を載せる。なお、中段の唐破風屋根は裳階ではないかという説もある。笠鉾の全高は約4.5ｍ。部材総数240点。収納箱に天明六年（1786）の墨書がある。

迦陵頻伽は西方極楽浄土に棲み、人首鳥身で妙なる声で鳴くという。

中段屋根の妻飾りには、鳳凰を彷彿させる「つばめ」の彫刻を載せる。上段の欄間は黒漆塗りに九曜紋と二引両紋を交互に配し、中層の欄間には芍薬や桔梗など８種の花模様を描き、下段の欄間には浪と三頭の龍の彩色彫刻を８面に部分ごと配している。幕は「黒天鵞絨地岩竹に双虎模様繍水引」と「朱色綾地化繊水引」がある。

③ 八代妙見祭の傘鉾の歴史

『松井家文書』の「御町会所古記之内書抜　寺社之部」の明和七年(1770)の条に次のような記載がある。

一　宝永年中、御家司松井牛衛門殿、後長慶と云、寄進之華蓋、長柄傘之如ク花を出し壱人ニて荷、神輿ニ随ヒ参候。今以其通也。其頃宮之町より出し候茂、同し事ニて大ふりに致。傘を緋縮緬ニて張、上に唐団扇之中ニ宮町之文字を居、下ニ遍うたん（ひょうたん）有、これツイキあけまきを以飾、一人持也。

一　元文三年(1738)相改宮ノ町も九ケ町同前ニ二重之蓋四人持ニ成、菊士童之作り物ニ成。

一　八ケ町よりハ天和貞享より追々出候由、出町亀同時代也。何レも最前ハ麁抹ニ成申候。

18世紀初頭の宝永年間（1704～11）に松井家の家司であった長慶という人物が、「はながさ(華傘＝捧持型傘鉾)」を寄進して神輿に随行するようになった。そして同じ時期に宮之町がより一層大型の傘鉾を出し、それは傘部を緋縮緬で張り、傘上には町名を書いた唐団扇を瓢箪の上に載せ、総角にした飾り紐を下げていた。ところが、元文３年（1738）には現在の傘鉾のように二層の屋根を持つ蓋を出すようになった。その他の８町は17世紀末には出していたが、最初の頃は“あらまし（粗末）な”ものであったという。

この史料から、八代妙見祭の笠鉾が捧持型傘鉾から始まったことは間違いないと思われる。この捧持型の傘鉾がどこから伝播してきたのかは分からない。九州内ならば、博多の松囃子の傘鉾や長崎くんちの傘鉾も考えられる。また、八町から出された傘鉾が捧持型であったとしても、極めて素朴なものだったと推測される。現存する資料で最古のものは、宮之町の笠鉾「菊慈童」の元文三年（1738）銘の木箱墨書である。前述の「御町会所古記之内書抜」の第二項と同年で、この年に現在のような笠鉾が成立したものと考えられる。八代妙見祭の笠鉾の制作時期は「菊慈童」の元文三年（1738）から「松」の文化二年（1805）までの間である。

このような他に例を見ない特殊な形態の笠鉾が、なぜ八代妙見祭に登場したのかは問題である。八代妙見祭の場合は笠鉾（楼閣式舁山型傘鉾）へと独自に発達したのである。

巨大な曳山などにできない八代町への藩からの行政的な規制、あるいは自主規制が行われた可能性が考えられるが、それを物語る史料は今だ知られていない。

正保三年（1646）、肥後藩主細川光尚は筆頭家老で将軍直臣でもあった松井興長を八代城の城主として封じ、薩摩の島津家に備えさせた。肥後藩の城下熊本町では藤崎八旛宮の祭礼「放生会」が最も盛大に行われていた。寛永十年（1633）の『祭礼次第』には「笠鉾　五十本　当町ヨリ

出ル」とあり、「藤崎宮祭礼絵巻」には熊本城下の各町から出された鉾（三ツ股剣鉾の下に布幡等を垂らした舁山）の列が描かれている。聖母八幡宮（現在の鹿央町千田八幡宮）でも「笠鉾」の記録が残されている。現在でも熊本県は山鉾・屋台の出る祭礼は少ない。近世の記録でも、北宮大明神（現在の菊池市北宮阿蘇神社）に「山」「屋台」、七所大明神（現在の富合町七所神社）に「引山車二両」などの記録が残されているぐらいである。藤崎八旛宮放生会の最大の見せ場は勢屯での馬追いであったことから、出し物としては笠鉾や鉾（舁山）程度であった。八代妙見祭では捧持型傘鉾からもっと豪華な出し物へと転換しようとした時、肥後藩お膝元の藤崎八旛宮の舁山を越える大型の出し物を創り出すことへの遠慮が働いたのではないだろうか。そのため、捧持型傘鉾を楼閣式舁山型笠鉾へと進化させたと思われる。

どのような発想の元で、他に例を見ない八代妙見祭の笠鉾は成立したのであろうか。ひとつは六角形や八角形の神輿等から着想した可能性が高いと思われる。ただし二層の笠部をもつようになるのには、他のイメージが加わったからだと考えられる。それは妙見下宮（現八代神社）に存在した多宝塔ではなかったか。『肥後国誌』には「多寶塔　二間四面高九間、九輪塔ト云。小西カ時社堂塔ヲ毀チ取ルニ此ノ塔ノミヲ残セリト云。本尊木佛座像長一尺一寸。承應元年（1652）中島町民氏人等再興之」とある。キリシタン大名小西行長の八代入封によって破却されることもなく、近世初頭には再興しており、妙見祭の傘鉾を造り出す時に、二層の多宝塔がヒントになった可能性もあったと思われる。

八代妙見祭の笠鉾の発達経緯については推論しか記せない。八代妙見祭の笠鉾の発生については謎が少なからずあり、解明されていないことも多いのである。

⑵ 小倉祇園祭の山車

① 小倉祇園太鼓の式次第

毎年７月初めに「打ち初め式」があり、その１週間後に八坂神社の「お潮井取り」がある。小倉祇園太鼓は７月第３金・土・日曜日に行われ、その初日の金曜日の「宵祇園」では八坂神社の「御神幸祭」のお下りがあり、山車が町内廻りをする、２日目の土曜日には「御神幸祭」のお上りがあり、小倉祇園太鼓の「競演会」が催される。３日目の日曜日には「据え太鼓競演会」があり、夕方から北九州市役所南側の通りでの「太鼓広場」には80台ほどの山車が巡行し、鉦と太鼓の音が響き渡る。１週間後に納会である「大狐落とし」が行われる。小倉祇園太鼓保存振興会は平成30年１月には122団体が加盟しており、祇園子太鼓の行事を主催している。

② 小倉祇園太鼓の山車（太鼓山車）

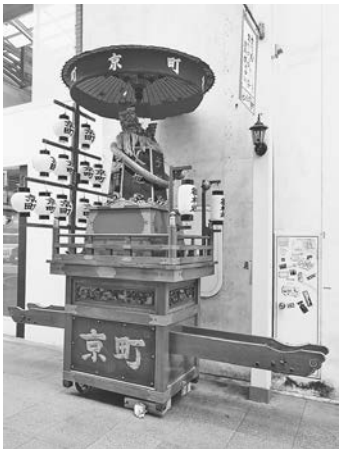
小倉祇園祭の小倉祇園太鼓では、現在、太鼓広場（廻り祇園）などで多数の山車（分類上「太鼓山車」とする）が登場する。小倉祇園太鼓の山車は、移動中に叩き手が歩きながら太鼓を叩けるように作られている。そのため、独特な形状を持つに至っている。小倉祇園太鼓の太鼓山車の基本形は、太鼓を載せる腕木と台車とにある。台車は四角い箱状で、下部に車輪が四輪付く。他の地方の山車は、木製の組合せ式の大型車輪や輪切りした丸太を加工して用いることが多いが、小倉祇園太鼓の車輪は直径20cmほどの、ゴム車輪付き自在車、あるいはゴム車輪付き固定車等を取り付けているのが特徴である。本来、これらの車輪は重量物運搬用の台車等に多用されているものである。台車本体はケヤキ材で製作されていることが多く、枠木には角材を用い、板材と組み合わせて製作される。ケヤキ材は薄褐色の拭き漆塗り、あるいは濃褐色の柿渋下地の拭き漆塗りで塗装され、中には合成樹脂塗料を用いているものもあるという。台車本体上部に欄間

彫刻風の飾り板を填めたり、縦桟の格子を填めた太鼓山車もある。鍍金した隅金具や錺金具を台車各所に打ち付けている太鼓山車も多い。台車側面等に扉や戸をつけて、内部を物入れにしている太鼓山車もある。また、台車側面の胴部に町名や団体名を大きく黒文字や金文字で表記しており、どこの太鼓山車か、一目で分かるようになっている。太鼓山車は台車上部を囲うように勾欄を巡らせるのが基本で、ほとんどが擬宝珠勾欄である。台車と同材、同一塗装で製作しているものも多いが、勾欄だけ朱塗りにしている太鼓山車もある。また、台車本体と同様に鍍金した錺金具や擬宝珠を取り付けているものも多い。太鼓を支える腕木は、ケヤキなどの厚い板材を縦にして、台車前後に平行して２本ずつ装着する。しかし、台車の中心軸に腕木を装着しているわけではない。前方の腕木は進行方向に向かって右側に、後方の腕木は逆に左側に偏って装着されている。これは前後の太鼓を両面打ちする二人ずつの打ち手が、台車に邪魔されずに打てるようにするために工夫されたためである。腕木の太鼓を載せる部分は上部を湾曲させて窪ませ、晒し布などで太鼓を縛って固定しやすいように加工している。また、腕木の先端は、寺院建築などの向拝に取り付けられる頭貫の両端の飾りのように整形され、側面に唐草文様の彫刻が施されていることが多い。小倉祇園祭の太鼓山車の曳綱は比較的短いものが多い。狭い町中での取り回しがしやすくなるように、途中から綱は二股に分かれて梯子状に棒を入れて曳きやすくしていることが多い。

小倉祇園太鼓の太鼓山車は、台車上の飾りの形から大きく４類型に分けることができる。Ａ．特殊な形状の太鼓山車（神山を含む）、Ｂ．提灯笹飾り型太鼓山車、Ｃ．屋形型太鼓山車、Ｄ．傘鉾型太鼓山車である。この中でＤの傘鉾型太鼓山車を紹介する。

小倉祇園太鼓の太鼓山車は、囃子方の太鼓の搭載を第一の目的とした山車である。風流としての趣向の要素が強いが、笹を立てる太鼓山車から屋形型太鼓山車に発展し、後述の「だし」の影響等で最後に傘鉾型太鼓山車が登場するように、依代としての性格も見受けられる。傘鉾型太鼓山車は、提灯笹飾り型太鼓山車の造り物として、傘鉾を搭載した山車である。町ごとに独自の形態を持っている。

昭和二六年（一九五一）頃製作　馬借六町内会（馬借六丁目）
昭和三〇年（一九五五）製作　京町銀天街
昭和三〇年（一九五五）製作　船場町
昭和三一年（一九五六）製作　中央銀座
昭和五七年（一九八二）製作　魚町二丁目



京町の太鼓山車

中央銀座町太鼓山車

古町三丁目の太鼓山車

馬借六丁目の太鼓山車

魚町二丁目の太鼓山車

馬借六町内会の太鼓山車は、台車上に基壇を載せて朱傘を立てる。朱傘上には三叉の鉾を立て、傘周縁部に「馬借六」という白文字を刺繍した赤い幕を巡らせる。基壇上に巨大な天狗面二面を背中合わせに前後に載せる。

京町銀天街の太鼓山車は、台車上に上から朱傘、鏡、その支持架である金色の波形、白黒漆塗り六角柱型額（下部に金色の波形彫刻、それぞれ「蘇民」「将来」「子孫」「人也」「大福」「長者」の銀文字入り）、これに掛けるように茅の輪の作り物、最後に基壇を載せる。朱傘は直径約五尺で、傘周縁部より少し内側に「京町」と白く染め抜いた赤い幕を巡らせる。

船場町の太鼓山車は、台車上に円筒形状に赤幕を巡らせ、その上に打ち出の小槌を載せ、白毛のついた台で支える。和傘自体は組み込まれていないが、傘鉾の形態を残している。

中央銀座の太鼓山車は、台車上に鋲打太鼓を載せ、黒塗り寄棟屋根形で先端が蕨手形の棟飾りを四隅に出した傘鉾を立てる。傘周縁部には五色の幕を巡らせ、傘下に「中央銀座」「中銀」と書かれた提灯を下げる。蕨手から台車高欄まで紅白の綱で結ぶ。太鼓と傘の間の黒塗り丸柱には赤と金色に塗り分けられた男龍と女龍が巻き付き、台車前方には「龍神」と記した札を立てる。

魚町二丁目の太鼓山車は、台車に上から鳳凰、玉、雲、基台、笠（鍋蓋）、傘周縁部から垂らす瓔珞（羅網）で飾る一本柱万度型の傘鉾である。鳳凰と玉、雲、基台は金色に塗られている。雲は四隅に突き出ており、基台も四角形を基本にしている。地元では「鉾山車」と呼んでいる。瓔珞は西鍛冶町の「だし」を模している。台車上に高欄はない。

なお、九電工九獅会と西紺屋一丁目町内会、それに古船場町三丁目の太鼓山車は、提灯笹飾り型太鼓山車に和傘を立てたものである。

③ 小倉祇園太鼓のだし（舁山）

現在、福岡県有形民俗文化財に指定されている小倉祇園祭の５基の山車は、本来は車輪がついた曳山ではなく、舁き棒のついた舁山であった。また、現在の太鼓を搭載する曳山も山車と表記されている。いずれもダシと訓読みされており、そのまま山車という用語を用いると、混乱する可能性が高い。そのため、前者を近世の表記法の「だし」を用い、後者には太鼓山車という新たな用語を用いる。

これらの「だし」は風流としての趣向と町印としての性格が強い。現在、神幸等で用いられていないため、依代としての要素は良くわからない。

弘化４年（1847）の「小倉祇園踊踊り物順番附」が「だし」の文献状の初出である。その中には、町々が出した「だし」や「傘鉾」「踊」など、各町の出し物が記され、これを見ると、当時の出し物が実にバラエティに富んでいたことが良く分かる。西魚町、宝町、米町、大坂町十二丁目、大坂町五六七丁目、八百屋町、竪町と大門町、蟹喰町、田町四五六丁目、西鍛冶町から計10基の「だし」が出されていた。

明治期になると、新聞などでは「纏（まとい）」と表記されるようになる。飾りが火消しの纏と形態的に似た多面体を多用していたためであろう。

昔、小倉祇園祭に出ていた「山車」が残されている。「紺屋町山車」「古船場町山車」「大門町山車」「堺町山車」「西鍛冶屋町山車」である。この５基の「山車」は昭和38年（1963）12月24日に「山車」という名称で福岡県有形民俗文化財に指定された。

小倉祇園会の「だし」は、江戸の一本柱万度型の流れをくむが、曳山ではなく舁山である。江戸からいつどのように伝わり、どのように変化していったのかは記録がなく、詳細は不明である。しかし、九州では他に例がない、江戸系の舁山であることは間違いない。

古船場町のだし（山車）

現在、「紺屋町山車」はいのちのたび博物館に展示され、「堺町山車」と「西鍛冶屋町山車」は同博物館の収蔵庫で保管されている。そして、「古船場町山車」は小倉城で、「大門町山車」は小倉北区役所でそれぞれ展示されている。

紺屋町のだし（山車）

１）紺屋町山車

安政三年（1856）建造。全高450cm。最上部の飾りは金鍍金した銅合金板製の鳳凰で、木彫金箔貼りの瑞雲の上に立っている。その下に七五桐の飾りがある。木枠を芯にして桐紋を銅板で作り、瑞雲の上に載っている。その下の町印は六角柱型で隅金具が打たれ、六面には「紺」「屋」「町」の文字がぐるりと二度陽刻され、黒漆塗りの地に文字だけは金箔を施している。笠はむくり型の黒漆塗りで、笠の縁には宝珠、龍、波浪文様の飾り金具が打ち付けられている。笠の周囲には白毛を幕のように垂らした馬簾がついている。軸は黒漆塗りの丸柱で直径は10.5cmあり、唐草文の錺金具付きである。基台は黒漆塗りの角材を四角く組み合わせたもので、後部には、台車下部中央の孔に柱を挿し込むために、上演部の一部を凹ませている。台車の四隅の柱下には鉄金具を装着して、車軸付きの鉄製車輪が前後につけられている。この車輪は後補と考えられる。舁き棒は２本あり、369cmの長さがある。舁き棒を挿し込む金具は、台の横木上の四角い鉄製金具である。

２）古船場町山車

安政四年（1857）建造。明治28年（1895）修復。全高433cm。最上部の飾りは金色の鳳凰で、その下に金の打出の小槌、蔵の鍵をぶっ違いに交差させる。鍵の柄の端には赤い揚巻結びを下げる。鍵の重なった部分には瑞雲をまきつかせ、瑞雲の中心に宝珠をあしらう。瑞雲は低い六角柱形の町印の上に載る。町印の各一面ずつに「古」「船」「場」「古」「船」「場」の文字を陽刻する。町印の下には雲龍の彫刻を施した低い円柱状の敷物があり、その下に笠がある。笠（傘）は円形で、黒漆塗りの浅い被せ蓋のような形状をしている。笠の下には赤色の幕をめぐらせる。笠の下部周縁部に金属の輪を下げ、そこから金色の短冊形をした金具を50個つけ、その下端には「丸に

四角」紋と四角い金属飾りをつける。この短冊形の金具は、火消しの纏の馬簾に相当する飾りである。基台は黒漆塗りの角材を四角く組み合わせたもので、上部の横桁に舁き棒を挿し込む四角い鉄の金具がついている。台車の下に前後に車軸のついた小さな車輪が四輪つくが、後補と思われる。

3）大門町山車

明治21年（1888）建造、昭和49年（1974）修復。全高444cm。最上部の飾り物は白い軍配で、左右上部に伸びる瑞雲の上に立つ。軍配の向かって左手に金色の太陽、右手に銀色の月を配する。日月の周囲には金色の瑞雲をつけ、軸は黒漆塗りに金の金具錺をつける。軍配の最頂部には白い毛を載せる。その下は扁額型の町印で、黒漆塗りで、額周辺と四角い枠、それに「大門町」という文字には金箔を貼る。町印を支えるのは金色の雲龍の彫刻である。笠は黒漆塗りのむくり形で、側縁部には唐草文を薄肉彫りにして金箔を貼りつける。笠の下には黒羅紗の幕を下げ、裾に金糸で波濤を刺繍する。基台は黒漆塗りの角材を四角く組んだもので、四隅の柱上部外側には舁き棒を挿し込む矩形の鉄金具がついている。舁き棒は長さ約3.6ｍあり、車輪を装着していないので、舁山として使用されていたと思われる。現在でも、毎年小倉祇園太鼓が始まる７月１日に大門町や小倉祇園太鼓振興会の人たちがこの山車を清掃している。

大門町の山車（だし）

４）堺町山車

明治22年（1889）建造。全高466cm。最上部の飾り物は剣と金幣である。真ん中に剣を垂直に立てる。剣の樋と柄を赤く塗っている。剣の根元から金色の御幣二本を左右に斜めに突き出す。剣の基盤は水平三方向に伸びた金色の瑞雲である。その下には三方向に内側に湾曲した円内に祇園守紋をつける。金色の巻物をぶっちがいに交差させ、ぐるりと帯をめぐらせたような熨斗模様を真鍮で作り出している。その下には、丈の短い六角柱角の低い町印が「堺」の文字を間隔を開けて三面に陽刻してある。三方向に波濤を上向きに伸ばす。その下は黒漆塗りでむくり型の笠部で、側面に丁子文の二種類の金具をけている。馬簾は白毛で、白い木綿布の幕に白毛を縫い付けたものである。中心となる柄は直径12cmで、貝象眼の漆塗りが施されている。基台は現存する小倉祇園の「だし」の中で最も大きく、幅190cm、長さ227.7cmあり、全体を黒漆塗りにして飾り金具をつける。勾欄をめぐらせ、床を張っているため、台上に人が乗ることも可能である。また、基台床の四隅内側に丸柱を立て、桁と梁などをつけており、梁と桁には丸鐶金具のついた枠を避けていることから、提灯を並べて下げていたものと推測される。しかし、この基台には担ぎ棒を挿し込む金具もその取り付けた跡もない。また、現在は基台底部の構造材に新材が付け加えられ、それに白いナイロンタイヤのついた自在車輪がつけられている。本来、基台には車輪もなかったのである。そのため、この基台は「だし」を

手前が堺町、
後ろが西鍛冶町の山車（だし）

その場に据え付けるためのものであったことが分かる。

５）西鍛冶町山車

明治31年（1898）建造。全高452cm。最上部の飾り物は、火焔宝珠の上に金幣を立てたものである。宝珠は三宝の上に載っている。折敷は八角柱状で、その下の三宝の台は扁平した八角形の短い柱状である。台は黒漆塗りで、各面には隅切り方形の金の枠をつけ、その中に金色の稲穂の彫刻をつける。三宝の下には「西加治町」という浮き彫りの文字の入った扁額を前後二枚つけ、扁額の左右にやや大型の金幣を斜めに立てる。その下は円形の敷物で、金の瑞雲渦巻く上を走る白い神狐三頭がついている。それぞれ宝珠、稲穂、巻物をくわえている。稲荷信仰を題材とした飾り物である。扁額の下には金色に塗られた笠があり、赤色のフェルトの幕を巡らせ、笠の周縁部から菱形の金具を敷き詰めたように下げている。基台は黒漆塗りで、角材を四角く組んだもので、四隅の柱上部外側には舁き棒を挿し込む四角い鉄金具がついている。後補と考えられる車輪が四輪ついている。幅155cmで長さ150cm、高さは104cmあるが、車輪を除く本来の高さは96.5cmである。舁き棒は２本あり、全長300cm、隅を丸めた９cm角の角材である。

⑶ 鹿児島のおぎおんさあ（祇園祭）の傘鉾

① 鹿児島のおぎおんさぁの行事次第

鹿児島市清水町の八坂神社では、毎年７月下旬の土・日曜日に「おぎおんさあ（祇園祭）」が催される。その１週間ほど前に「傘鉾建祭」などの祭典が行われる。午後２時から傘鉾建祭をして、２時半からの八坂神社での神事で神輿関係者のお祓いを行う。３時から「稚児御位奉戴祭」を行い、稚児に五位の少将の位と十万石のお墨付きを与える。

祭礼初日である土曜日は、午後５時から天文館公園で「宵祭」をする。平成28年（2016）には、鼓工房「粋」の「太鼓演奏とふれ太鼓」「西俣八丁杵踊り」「阿蘇猿回し」「地元大道芸パフォーマー」「傘鉾演技」「鹿児島民謡会の演奏」「霧島神楽」などが催され、８時過ぎの「御輿渡御」で終了した。日曜日の昼12時半から八坂神社で「社頭祭」、１時半から天文館通のアイム（会議所ビル）前で「発幸祭」を行う。午後２時から天文館通りは歩行者天国になり、午後２時半に路上で待機していた御神幸行列が出立する。市内目抜き通りを市電軌道を中心に反時計回りで巡行する。神幸行列は次の順序であった。

１．ふれ太鼓・子ども御輿10基、２．実行委員長、３．猿田彦、４．馬上の神職、５．露払い、６．社名旗、７．大鉾（上町）２基、８．傘鉾（大傘・祇園傘／上町）３基、９．大鉾（下町）２基、10．傘鉾（大傘・祇園傘／下町）３基、11．地方山車１基、12．賽銭箱、13．おぎおんさぁ振興会会長、14．同振興会副会長、15．菅翳・紫翳各１本、16．神官山車１基、17．阿吽山車１基、18．賽銭箱、19．御所車（祇園官女・祇園巫女各１名）１基、20．十二戴女12名（芋桶を頭上に載せて運ぶ）、21．弓矢、22．賽銭箱、23．鉾、24．錦旗、25．五色旗、26．太刀、27．御神馬１頭、28．鉾、29．稚児花籠（花駕籠）10基、30．大人御輿（男御輿６基、女御輿４基）。

行列は高島馬場電停の辻で折り返し、朝日通り電停の所から戻ってくる。行列では最初に上町が先導し、朝日通り電鉄近くで入れ替わり、そこから下町が先導するようになる。午後４時過ぎ、行列の先頭がアイム前に到着すると、次々に行列は解散してゆく。午後５時半にアイム前で「着幸祭」を執行し、６時に御輿渡御があり、祭礼は終了となる。

② 鹿児島のおぎおんさぁの傘鉾

上町と下町が、それぞれ「大鉾」２基と「祇園傘」３基ずつを出す。大鉾と祇園傘を合わせて「傘鉾」といい、祇園傘は「大傘」とも呼ばれている。上町の傘鉾３本は高さ４間（約7.2ｍ）と言われているが、実際は約8.4ｍある。下町の２本の大型の傘鉾は約９ｍ、やや小型の傘鉾１本は「女傘鉾」といって女性が持ち、３間半（約6.3ｍ）というが、実際は約７ｍある。竹棹は根回り約９寸から８寸５分ほどのカラタケ（唐竹＝真竹）を用い、何カ所か細紐を巻いて漆を塗っで強化している。この棹の上端部に直径1.8ｍの赤い祇園傘（三つ巴の神紋入り朱傘）を竹棹の先に挿入して取り付け、傘周辺に30cm幅の赤い布を幕のように張り巡らせる。傘の下には白い御幣を下げ、長い朱紐でシンコン（神魂）を吊り下げる。朱紐は途中で２本になり、神魂を水平に吊り下げ、また下方で１本となり、リン（鈴）１個を下げる。神魂とは錦で包んだ筒状の容器で、中に八坂神社のお守りが入っているという。鈴は巡礼鈴か独鈷鈴の鈴本体部分を流用したものと思われる。

鹿児島祇園祭の祇園傘の神魂と鈴

大鉾は竹棹の上端に金属製の薄い鉾を装着したもので、鉾の根元には左右に日輪と月輪を配した雲型がついている。竹棹は赤黒に螺旋状に塗り分けられている。竹棹の上部には細い竹棹が水平に結びつけられており、「八坂皇神」と赤地に文字を白抜きにした長旗と白地に赤文字を染め抜いた長旗を２枚ずつ計４枚吊り下げる。大鉾も傘鉾と同様に神魂と鈴を吊り下げている。

祇園傘を立てて巡行する

傘鉾の建て方にはいくつか方法があり、傘鉾を捧持した腕を差し上げるもの、肩や顎の上にのせるもの、頭にのせるものなど５通りある。上町傘鉾振興会と下町傘鉾振興会が傘鉾建てを継承している。

鹿児島の祇園会は元禄期（1700年前後）から盛んになったという。ぎおんさぁの傘鉾巡行に参加している古老が、大正初年生まれの人から、その人が30歳頃に下町で傘鉾巡行が始まったと聞いたことがあると話をしてくれた。このことから、傘鉾巡行は昭和15年前後に創始されたと推測される。

この「傘鉾」を出す上町と下町は現在の地名表記ではなく、近世のものである。上町はＪＲ鹿児島駅周辺とその北東方向の地域で、小川町・和泉屋町・惠美須街・車町・栄町・柳町・浜町・向江町が属している。下町は上町の西南方向の地域で、山下町・易居町・生産町・六日町・築町・汐見町・泉町・金生町・中町・呉服町・大黒町・堀江町・住吉町・船津町・新町・松原通町・新照院通町・薬師馬場町・鷹師馬場町・西田町・平之馬場・西千石馬場町・東千石馬場町・加治屋町・山之口馬場町・樋之口馬場町・新屋敷通町・下荒田町・高麗町・上之園通町・冷水通町・長田町・下竜尾町・上竜尾町・池之上町・鼓川町・稲荷馬場町・清水馬場町・春日小路町など、広域にわたっている。

平成20年の祇園祭では57年ぶりに上町傘鉾振興会の大傘鉾が新調された。

【参考文献】

『八代妙見祭』八代市文化財調査報告書第43集・八代市教育委員会・2010。
『妙見祭笠鉾』八代市文化財調査報告書第９集 －八代神社祭礼神幸行列笠鉾等基本調査報告書－・八代市教育委員会・1996。
原田聡明『八代妙見祭ポケットガイド －妙見祭の歴史と笠鉾を中心に－』私家版・2008。
『大妙見祭展』八代の歴史と文化21・八代市立博物館未来の森ミュージアム・2011。
『小倉祇園太鼓』北九州市文化財調査報告書 第158集・北九州市教育委員会・2018。